不思議研究会の活動記録

穴栗鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不思議研究会の活動記録

【Ｎコード】
Ｎ２４１６Ｍ

【作者名】
穴栗鼠

【あらすじ】
高校入学後、思っていたようなクラブを見つけられなった上山美久は「不思議研究会」というクラブを作る。そのクラブの部員となった僕は、上山美久の下僕としてこき使われることとなった。

部員確保（前書き）

高校入学後、思っていたようなクラブを見つけられなった上山美久は「不思議研究会」というクラブを作る。そのクラブの部員となった僕は、上山美久の下僕としてこき使われることとなった。

部員確保

「美久、起きなさい。ごはんですよ。」
私は、ベッドの中で握ったり離したりしていたハンドグリップを置いて、起き上がった。

ごはんを食べながら、おかあさんに訊ねた。
「きょうお弁当にりんご持って行きたいんだけど、ある？」
「ええ、あるわよ。剥きましょうか？」
「いえ、いいの。学校で剥くから、まるごと1個ちょうだい。」
私は、りんごを受け取ると、針と糸で少し細工をした。弁当箱と一緒に鞄に入れると、学校に出かけた。天気は良好。何かいいことありそう。

僕の後ろの席の上山美久さんは、ストレートのロングヘアーで、整った目鼻立ちをした女の子だ。高校に入学してから1週間がたち、顔と名前がだいぶ一致してきた。男子としては、当然、彼女に目が行く。クラスの男子は、話す機会を常に狙っているが、おしとやかな性格で、いつも女の子同士でしか話をしていない。たまに、男子が話しかけても、彼女の周りにいる女子が代わりに答えてしまう。僕は今朝までそう思っていた。

そんな彼女がお昼に、弁当箱とりんごを持ってきていた。みんなと机を合わせるために机を持ち上げたときに、ちょうど立っていた僕の椅子の上に落ちてきてしまった。落ちた瞬間に僕はそのりんごを拾い上げ、彼女の前にりんごを差し出した。ここまでは普通。
彼女は、顔を赤くして受け取った。その後、何を思ったのか、りんごをスカートで拭いたかと思うと、手で真っ二つに割り、半分を

僕の前に差し出した。
「どうぞ。」
僕の顔には、驚愕の色が浮かんでいただろう。それでも、無意識に手を出し、りんごを受け取った。
彼女は何事もないように微笑みながら、机を後ろに向けて、女子グループで話し始めた。
僕は腰を下ろし、割れたりんごの面を見つめていた。今、割れたわけではなさそうだ。

僕は、彼女が自己紹介のとき、不思議なものが好きで、数学は得意ですと言っていたのを思い出した。
弁当が食べ終わり机を戻して女子たちの会話が途切れたとき、僕は上山さんに声をかけた。
「ねぇ、９の７乗を７で割ると余りはいくつか分かる？」
いきなり数学の話題を振ったら、大抵の女の子は引くよな。でも、ここで何げない話題を振ったら、逃げられると思った。
「フェルマーの小定理ね。９を７で割った余りと等しいから、答えは２ね。」
にこりとして、上山さんは答えた。
すごい。これを簡単に答えることができるとは思わなかったよ。
数学が得意と言うだけはあるね。
「これくらいは、簡単よ。じゃ、この問題はどう？
１２ｇ以上の自然数の重さで、４ｇと７ｇの分銅を無限に使っても測れない重さはいくつかな。すべて答えられる。」
女の子から逆に問題を出されるなんて、まったく想像していなかっただけに、僕はうろたえてしまった。多分、引きつった顔をしていただろうな。
え～と、１２ｇは、４ｇの分銅３つ。１３ｇは、４の倍数で無いから、７ｇを１つ使うと残りは６ｇ。４ｇの分銅で６ｇは作れないから、１３ｇは作れない。１４ｇは７ｇ２つ。１５ｇは７ｇ１つと

４ｇ２つ…。彼女の前では緊張して暗算ができなくなっていた。
しかたなく、１３ｇは作れないと僕は言った。
「できないのは、１３ｇだけ？他の数は作れるの？」
高みから悠然と僕を見つめる目で、僕に訊いた。
不意に質問されたから、あがっているだけだよ。ちょっと、ノートと鉛筆を出すから待ってて。
「ふ～ん。私には不意に質問してきたくせに。」
上山さんは、余裕の態度でニタリと笑いながら言った。
落ち着け。僕は心の中で繰り返した。
ノートに４と７で作れる自然数を書いていった。
１６＝４×４＋７×０
１７＝作れない。
１８＝４×１＋７×２
１９＝４×３＋７×１
２０＝４×５＋７×０
２１＝４×０＋７×３
２２＝４×２＋７×２
２３＝４×４＋７×１
２４＝４×６＋７×０
作れない数が出てこない。作れないのは１３と１７だけか。だが、これだけだと、どうして言える。
僕の頭はフルスピードで回転したが、空回りを続けるだけだった。
１０１は作れるのか。１０１＝８０＋２１＝４×２０＋７×３。作れる。
計算してみれば作れることは言えるが、絶対に作れるというには、どう言ったらいいんだろう。
僕には、分からなかった。
僕は、上山さんを見上げた。それを敗北の宣言として受け取ったのか、彼女は、よしよしとあやすような顔を僕に向けていた。

１３と１７は作れない。でも、これ以外にはないと言うことは僕にはできない。
僕は、最大限の丁寧さで答えた。
「今、答えを教えてしまうのは容易いけど、それでは、悔しいでしょ。放課後まで待ってあげるわ。それまでに、答えられるように考えておくことね。それでも分からなければ、土下座とは言わないけど、お店のジュースとケーキで手を打ってあげるわ。」
勝ち誇ったような目をしながら、僕に微笑んだ。
僕は、前を向き、授業などは全く無視して考え始めた。

放課後、上山さんは僕を無視して鞄を持って教室を出て行った。僕は帰宅する彼女の後を追った。彼女は、一人で公園の中を歩いていく。広場のところに差し掛かった。その時、彼女は大きく振り返った。
僕にはとっさに隠れる場所を探してしまった。僕のギョッとした顔を、彼女はじっと見た。
「ストーカーしているの。」
僕は、なんて言えばいいのだろう。全く言葉が浮かんでこなかった。
「お昼の問題のことなんだけど…」
これだけ言うのがやっとだった。
「ふ～ん。その先にあるお店の。ジュースとケーキがおいしいの。奢ってくれるんでしょ。」
彼女は、近づいてきて、僕を捕まえるように手を握った。僕は、財布の中身が心配になったが、彼女に引きずられるまま歩き出した。

財布には千円札が１枚あったので、コーヒー２つとケーキ１つの代金を払うことができた。
テーブル席で向き合って座った。
「代金を払ってくれたということは、分からなかったということね。

」
僕は、不機嫌な顔をしながらも、うなずいた。
彼女は、僕のノートを指差して言った。
「問題は、説明の仕方ね。ここに書いてあるように、１８から２１までの４つの連続した数が作れているでしょ。そうすれば、それぞれに４を足すことによって、２２から２５までの連続した４つの数が作れる。さらに４を足せば、２６から２９まで作れる。そうやって行けば、１８以上の数はすべて作れるわ。だから、１２以上でできないのは１３と１７だけ。どう？」
なるほど、簡単に説明できる。目から鱗が落ちたような気がした。

上山さんは鞄から紙を取り出した。
「これから、きょうのような気分を味わいたくないかな～。
私、世の中の不思議なことをいろいろ考えていこうと思っているの。だから、これから一緒に活動していこうと思うのなら、この紙にクラスと名前を書いて。」
表題に、「不思議研究会入会届」と記されていた。こんな研究会あったかな。
「今度、私が作るの。ちなみに、私が会長よ。」
彼女が、にんまりとしながら言った。

僕は、その紙にクラスと名前を書かざるを得なかった。
「明日から活動だからね。授業が終わったら教室に残っていてね。」
それだけ言うと、上山さんはコーヒーを飲み干して、出て行った。

僕は、彼女が食べ散らかしたケーキの後を片付けた。どうやら、僕は彼女にはめられたらしい。最初っから、こうなることを見通していたようだな。
明日が楽しみだ。

部員確保（後書き）

初めての投稿です。よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2416m/

不思議研究会の活動記録

2010年10月8日13時48分発行